松村通信第１３８号

2023 年 5 月 28 日
松村勝弘

資本主義の多様性

近況　立命館大学をリタイヤした後、大学の研究室を引き払って、自宅から自転車で 10 分あまりのところにオフィスを構えている。そこはまた JR 二条駅近くの朱雀キャンパスまで自転車で 5 分あまりのところである。その図書館ではどのキャンパスのものであれ、立命館大学所蔵の本を借り出すことができる。そして毎日オフィスに通っている。雨の日には「敬老乗車証」を活用してバスで通っている。そして読書三昧の毎日である。ここのところも、乱読中に変わりはない。

相変わらずの乱読である。少し前、冨田洋介『資本主義はなぜ多様化するのか』[1] という本を著者からいただいたが、これをきっかけに、あれこれ考えている。そして、著者も引用しているホールとソスキスの『資本主義の多様性　比較優位の制度的基礎』[2] という本も、関心のあるところを中心に読んでみた。1991 年に出されたアルベール『資本主義対資本主義』[3] では、資本主義をアングロ・サクソン型とライン型に分けて米独を比較し、話題になっていたのを覚えている。

アマーブルは『五つの資本主義』[4] といっている。すなわち、資本主義を、①市場ベース型モデル、②社会民主主義型モデル、③大陸欧州型モデル、④地中海型モデル、⑤アジア型モデル、の五つに分類している。アルベールのアングロ・サクソン型がここでいう市場ベース型モデルであるが、ライン型とひとまとめにされたいたのが、四つに分けられている。これをライン型にまとめるには無理があるので、四つに分けているわけである。

これらにおいては、資本主義は 1 つではない。資本主義は多様であるとして、資本主義の多様性(Varieties of Capitalism)が論じられている。「資本主義の多様性」という言葉で、立命館大学図書館のサイトで調べてみると、119 件もの文献が検出された（重複もあるのでそれよりは少ないだろうが）。しかもそれらはアルベールの上記著書出版以後のもので、さらに 3 件を除いてすべて 2003 年以後のものである。資本主義の多様性がなぜ最近になって関心を集めるようになったのか。

グローバル化　よく言われるように、東欧・ソ連の社会主義体制崩壊があった 1989 ～ 91 年に続く 1990 年代に，資本主義経済のグローバル化が本格的に推進された。グローバル化すなわちアメリカ化である。「ソビエト体制の崩壊によって資本主義と民主主義の勝利が予想されたこともあったが、世紀転換期の今日、そうした勝利がはっきりするどころか、逆に、ながらく抑圧されていた疑問がよび覚まされている」[5] という。

私の専門分野である財務論でも、コーポレート・ガバナンス、株主中心主義一辺倒となった。果たしてそれで世界はうまく行くのか。そういう疑問を感ずる人々も多い。とりわけ 2008 年のリーマンショック・金融危機以後、株主資本主義を謳歌していた世界もステークホルダー資本主義に傾きつつあるかに見える。

とはいえ、収斂論に違和感を感ずる論者を中心に、あるいはマルクス経済学のある種の流れを汲んでいるレギュラシオン論者や制度派経済学者が資本主義の多様化を叫んでいる。

収斂論　新古典派経済学を中心に、資本主義は、すべてアメリカ型に収斂するであろう、いや収斂すべきだと言われた。だがアメリカ型一辺倒ではうまくいかないという考えが資本主義の多様化論である。しかし日本は周回遅れのアメリカ一辺倒であるかにも見える。コーポレート・ガバナンス論などを見るとそう感じざるをえない。冨田[2023]もそう感じて書かれたものではなかろうか。ただしその分析方法などには疑問が多いが。

各国には各国の事情があり、すべてアメリカ型があてはまるわけでないことは明らかであろう。にもかかわらず、日本でコーポレートガバナンス・コードなどなどが制定され、アメリカ型を理想としているかに見えるのは

いかがなものだろう。資本主義は多様なのである。「アメリカ資本主義モデルがしょせん日本の模範たりえないことは、今回の世界経済危機で明白であり、日本は再び独自の資本主義モデルを模索しなければならなくなっている。」[4] まさにその通りであろう。その国の実情に合った形で経済発展を遂げていくべきであると考える。日本の「失われた 30 年」にはそのような日本の実情を無視して、アメリカをまねようとする政策ミスもかかわっているかもしれないと思う。

制度補完性　なぜ収斂しないのかにかかわって言われる。グローバル化・「市場化の圧力のもとで、個々の制度が変化しているにもかかわらず、経済システム(制度的構造)が多様でありつづけるのはなぜか。」[7] アマーブルなどはそれを考える際、制度補完性という概念を利用している。日独などで市場圧力が強まる中でも、共同決定法・雇用保障・銀行優位(独)、経営者従業員共同体・雇用保障・メインバンクシステム・企業系列(日)といった形で、株主・金融資本からの圧力をかわそうとする。確かにこれまでそうしてきたことは間違いない。「欧州大陸で市場ベース型モデルが一般化していくという見通しはない。というのも、まず構造的理由として、ヨーロッパ諸国の競争は、特殊な制度的特徴とそれと結びついた補完性に基づいているからである。また政治的理由として、どの社会政治的ブロックもそのような急進的変化を支持しないだろうからである。」[8]

しかし、日本の場合、経営者が株主・金融資本の圧力をかわすことができず、彼らと共同して従業員・労働者と対峙する（している）かもしれない。だが、日本でも制度的補完性ないし経路依存性[＝過去を引きずっている]から単純に市場ベース型に移行するとは思えない。資本主義はすべて市場ベースのものではあり得ない。

制度階層性　しかも諸制度は階層的である。貨幣・金融体制、競争形態、賃労働関係、国家形態、国際体制などでどれかが支配的制度であるという。それらが補完的であるだけでなく階層的であると考えられる。「階層性の上位にある制度ほど安定的で変化しない[し]……制度の『変わりにくさ』を規定しているのは支配的社会ブロックの利害」[9]だという。彼らの利益になることであれば変わる。その意味でハイブリッド化する。それにしても制度は複雑に入り組んでいるのである。市場型が良いからと言って、それへと簡単に移行できるものではないのである。

私の専門領域に惹きつけていえば、コーポレート・ガバナンス改革や金融システム改革は叫ばれ続けているが、必ずしも上手くいっていないように見受けられる。改革を先導してきた竹中平蔵氏は「改革疲れというが、そもそも疲れるほど改革していない」[10] というが、彼には制度が理解できないようである。世の中はそんなに単純なものではないのである。どうすればいいのかを考える責任がわれわれにはある。

ーーーー

1) 冨田洋介[2023]『資本主義はなぜ多様化するのか ── 法の起源から考える金融市場の国際比較 ── 』ミネルヴァ書房。

2) Hall, P. A. and D. Soskice(eds.)[2001], *Varieties of Capitalism: The Institutional of Foundations of Conparative Advantage.*：ピーター・A・ホール、デヴィッド・ソスキス編著、遠山弘徳他訳[2007]『資本主義の多様性　比較優位の制度的基礎』ナカニシヤ出版。

3) Albert, Michel[1991]*Capitalisme contra Capitalisme:*ミシェル・アルベール著、小池はるひ訳[1992、改訂新版 2011]『資本主義対資本主義』竹内書店新社。

4) Amable, Bruno[2003]*The Diversity of Modern Capitalism*, アマーブル著・山田鋭夫他訳[2005]『五つの資本主義　グローバリズム時代における社会経済システムの多様性』藤原書店。

5) Robert Boyer[2004], Une Theorie du Capitalime Est-elle Possible?　、山田鋭夫訳[2005]『資本主義 vs 資本主義　制度・変容・多様性』藤原書店、9 頁。

6) 田中修[2013]「世界経済危機を契機に資本主義の多様性を考える(第 45 話・完)総括(10)日本資本主義の行方」『ファイナンス』49 巻 5 号、66 頁。

7) 原田祐治[2005]「制度における補完性と階層性－ B.アマーブルによる制度理論へのアプローチ」『経済科学』第 52 巻第 4 号、93 頁。

8) アマーブル邦訳[2005]298 頁。

9) 原田[2005]101 頁。

10) 「銀行誤算の２０年（１）りそな救済　関係者に聞く」『日本経済新聞』2023 年 5 月 17 日号。

ＨＰ，ＦＢを見て下さい。又何でも意見を。
皆さんのご意見を歓迎します。HP（http://www.ritsumei.ac.jp/~matumura/）もご覧下さい。**フェースブック**もやってます。また，メールで意見交換しましょう。メールをよこして下さい（matumura@mba.ritsumei.ac.jp）。